

[478] 城内から戻ってきた阿 Q 『阿 Q 正伝』を読む (1)

(1) えっ、阿 Q が举人旦那の家で働いていた！

話題を『阿 Q 正伝』に戻します。

城内から帰ってきた阿 Q が酒屋の主人“掌柜”に探りを入れられて、城内での得意な生活、いわば「中興史」を語り始めるあたりでしたね。

魯迅の文章に慣れていただくために、なるべく原文を引くことにしましょう。

据阿 Q 说，他是在举人老爷家里帮忙。这一节，听的人都肃然了。这老爷本姓白，但因为合城里只有他一个举人，所以不必再冠姓，说起举人来就是他。这也不独在未庄是如此，便是一百方圆之内也都如此，人们几乎多以为他的姓名就叫举人老爷的了。在这人的府上帮忙，那当然是可敬的。

(2) 「举人」は今で言うと

阿 Q が言うには、彼は举人の旦那の家で働いていたらしい。

「举人」というのは科挙の郷試（府州県段階の試験）に合格した者のことで、中央での役人の登竜門である「進士」の受験資格を有している。地方にあっては举人の資格を有するだけで、十分に名士である。村でいちばん威張っている趙太爺の息子にしても、まだ举人の前段階である「秀才」に過ぎないのだから。

乱暴を承知で今日に置き換えれば、「秀才」は超難関大学の法学部あたりの在学生、「举人」はその大学の卒業生、「進士」は国家公務員の I 種合格者。いや、もう少し難しいか。今は廃止されたが、高等文官試験合格者といったところか。

(3) 阿 Q は「二度とあんな所で」と言うが

その举人の旦那の家で働いていたという話を聞いて、みなショックを受けてしゅんとなった。

この旦那はもともと白^{バイ}という姓であるが、城内で举人は彼一人しかいなかったのだから、わざわざ姓をつけて呼ぶまでもなく、举人と言えば彼に決まっていた。これは未庄だけのことではなく、百里四方のうちどこでもそうであって、彼の姓名が举人旦那だと思っている人さえ少なくないというありさまであった。

それほど人の邸^{やしき}で働いていたというのであるから、聞いた人たちが、尊敬の念にうたれるのはあたりまえのことだ。

ところが、また阿 Q によれば、もう二度とあんな所で働きたくないとのことなのである。

(4) いい気味でもありもったいないようでも

但据阿 Q 又说，他却不高兴再帮忙了，因为这举人老爷实在太“妈妈的”了。

ちょっと語学的なことに触れておけば、ここの“高兴”は「楽しい、愉快だ」という形容詞ではなく“愿意”（喜んで…する）という意味で使われている。“妈妈的”はすでに取り上げたように「こん畜生」ぐらいの罵^{ののし}りことば。

这一节，听的人都叹息而且快意，因为阿 Q 本不配在举人老爷家里帮忙，而不帮忙是可惜的。

举人旦那は「こん畜生」だからもうあんな所で働きたくないという話を聞いて、みなため息をつきながらも痛快がった。というのは、もともと举人旦那の家で働くような柄^{がら}ではないが、かと言って働きに行かないのも、またもったいないような気がしたからである。

2016/11/25